

## 「言葉」への関心を高める授業作りをめざして ～「意外性」のある学習活動の模索～

永野信吾

### はじめに

平成24年度に私が担当した学級は、学習に対して意欲的な生徒が多く、国語の学習にもとても前向きに取り組んでいた。読書が好きな生徒も多く、毎日の朝読書の時間や休憩時間にも集中して本を読んでいる生徒も多かった。授業中に作品の感想を書かせると自分なりに考えをまとめてワークシートを埋めることはできるものの、それをみんなの前で発表するように求めると、積極的に手を挙げる生徒は少なかった。自分の作品のとらえ方や感想に自信をもてない生徒が多いのではないかと思われた。

子どもたちの日々の前向きな取組が自信につながり、その結果、自らの考えを積極的に発信できるようにするためにはどうすれば良いのだろうか。そのために必要なこととして次のようなことを考えた。

①学習活動における子どもたちにとっての「意外性」

②自分の成長を感じられる場面

この二点を大事にしながら次のような実践に取り組んだ（以下、見出し後にこの二点について示す）。

### 1 「読むこと」についての実践から（①懐かしい作品との再会

②初発の感想と批評文を読み比べる場面）

#### （1）読み比べて気づいた魅力を自分の言葉で表現しよう

この学年の生徒たちは文学的文章について、2年生の後期に菊池寛の「形」や太宰治の「走れメロス」といった作品を学習してきている。その中で、「形」については他の短編小説との比較から、文章構成や表現上の仕掛けや工夫、その効果とそこに込められた作者の意図などに注目し、作品のもつ魅力について批評文を書くという活動に取り組んだ。以下は、「形」についてある生徒が書いた記録の抜粋である。

#### 【初発の感想】

- ・唐冠纒金のかぶとをかぶるだけで威圧感が出るというのがおもしろい。（生徒A）

#### 【批評文】

- ・この「形」という作品は、ラストの緊張感がとてもうまく表現されていておもしろい。その理由は二つあると思う。一つ目は、80ページの10行目から終盤に近づくにつれて、1文1文の文字数が少なくなっているということである。1文の文字数を少なくすることによって、最初のゆったりとした状況とは違い、新兵衛の心情、そして緊張感をとてもうまく表現していると思う。また、最初にゆったりしたところがあるからこそ、ラストの緊張感が際立ってくるのだと思う。二つ目は、新兵衛の呼び方の変化である。最初の方は「新兵衛」と書かれているのに対し、81ページの2行目の、「……が、彼はともすれば負けそうになった。」からは、「彼」と書かれているのである。このように、呼び方を変化させることで、「形」の無くなった新兵衛の、相手にとっての脅威の変化を示そうとしているのではないかと思う。（生徒A）

この生徒の「形」に対する感想は、初読のときも学習を終えたときも共通して「おもしろい」である。しかし、その理由として挙げる内容には大きな変化が見られる。これまでの取組を通して、自分だけでは気付くことができなかった表現の工夫やそれがもつ意味について、見方を広げることができていると思われる。また、それらを表すことばについても少しずつ広がりを感じら

れるようになってきた。

そこで、これまで培ってきたこの読みの成長を、生徒自身が実感できる機会を設けることによって、自分のとらえ方に自信をもつことができるのではないかと考えた。

## (2) 新美南吉作品と批評文について

本学校の国語科では、言葉の学習、特に「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ、深めながら、子ども自身が自己の変容をとらえる機会を大切に、よりよい言語生活や社会生活を送ろうとすることのできる子どもの姿を目指している。初読の「読み」を他の学習者の「読み」と照らし合わせながら更新していくことによって「個の読み」が確立されていく。単元の終末に、単なる感想ではなく、各自が根拠を明らかにして価値判断を記した批評文を書き、それを読み合うことで、一人一人の読みを一層深めることが可能となると考え、これまで実践を重ねてきた。

新美南吉の3つの作品を取り上げ、読み比べることによって、それぞれの作品のよさについて考えるとともに、新美南吉という作家が描く作品世界についても考えさせたい。ここで新美南吉を選んだ理由は2つある。まず1つは、小学生時代に聞いた覚えのあるなじみ深い作家であること。その名前を覚えていないにしても、教科書教材であった「ごん狐」には懐かしさを感じるであろう。他の2作品についても、同じ作者の書いた児童文学であり、長さにも多少の差はあるが、抵抗なく作品の世界に入ることが可能である。そして2つめは、「ごん狐」を学習した当時、うまく説明ができなかったことでも、今ならば自分の言葉で表すことができるということが挙げられる。

一方、批評文を書くという活動については、2年生の秋から取り組んできた。第3学年における「書くこと」と「読むこと」を関連付けた言語活動の例として挙げられているものであるが、第2学年の内容をおさえるためにも有効な手段だと考え、実践してきた。しかし、その有効性についての受け止めは生徒一人一人で個人差が大きかった。3年生になり、新しい教科書にある『批評』の言葉をためる」は生徒たちにとって大きなヒントになった。

学習のまとめとして「批評文を書く」ことは、それに向けて細かく読みを進めていくことの動機付けにつながると思われる。これまでの学習で身に付けた力を活かし、自分の成長を実感できる機会としたいと考えた。

## (3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

新美南吉作品を取り上げたこの単元でもこれまでのように、まずは初発の感想を書くことから始めた。過去の学習によって作品の表現を手がかりとして分析的に読むことが少しずつできるようになってきている。しかし、他の生徒の意見を聞くことで初めて気付くことも少なくない。単元終了時に、最初は分からなかったけど、最後はここまで読めるようになったと、変化を実感させるためにもまずは自分で感じたこと、思ったことを記録させておきたいと考えたからだ。

次に作品を各自で読み深めていく際、生徒に考えさせたい登場人物についての描写やセリフとしては、次のような部分が挙げられた。

### 【ごん狐】

- ・はたけへは行って芋をほりちらしたり……とんがらしをむしりにとって、いったり、いろんなことをしました。
- ・家の中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。
- ・「神さまにお礼をいうんじゃあ、おれは、ひきあわないなあ。」

### 【てぶくろを買いに】

- ・そのとき、母さん狐の足はすくんでしまいました。

- ・母ちゃん、人間ってちっともこわかないや。
  - ・ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。
- 【牛をつないだ樁の木】
- ・利助さんが、夜おそくまでせつせと働くのは、じぶんだけのためだということがよくわかったのです。
  - ・「けっきょく、ひとはたよりにならんとわかった。いよいよこうなったら、おれひとりの力でやりとげるのだ」
  - ・「つまり、わたしはじぶんの井戸のことばかり考えて、あなたの死ぬことを待ちねがうというような、鬼にもひとしい心になりました。」

これらの表現のもつ意味について、まずは各自で考えをもたせた。その上で、グループ内の話し合いを行い、それまで自分が意識していなかった見方・考え方に気付かせることをねらった。食い違う意見が出た場合も、どちらが正しいか答を一つに絞るのではなく、視点の違いによって様々な可能性が考えられるということをおさえることで、思考に幅をもたせたいと考えたためである。そして、話し合いの中から新美南吉が読者に伝えようとしたことは何かを考えさせた。

数多く存在する新美南吉の作品の中で、「ごん狐」は初期の、「手袋を買いに」は中期の代表作と言われる。これらの作品は狐が登場するという共通点をもつとともに、「母」の存在が一つの鍵となる。「ごん狐」はいたずらの償いを繰り返しているうちに兵十に撃たれるという悲しい結末を迎える。また、「手袋を買いに」では人間に対して興味を持ち、親近感さえ感じている「子どもの狐」に対し、「お母さん狐」は最後まで「ほんとうに人間はいいものかしら。」と繰り返す。「子どもの狐」の冒険は成功するが、読み終えたあと、胸に何かかき引っかかったような後味の悪さが残る。一方、晩年の代表作と言われる「牛をつないだ樁の木」を見ると、結末が他の2作品と大きく異なるのである。主人公の「人力ひきの海蔵さん」は、みんなのために峠に井戸を掘ろうと思いつき、数々の困難を乗り越え、最後には井戸を完成させるというハッピーエンドの形をとるのである。もちろん、この変化には新美南吉自身を取り巻く環境が大きく影響していると思われるが、そこには触れずに、まずは作品自体と向き合わせたいと考えた。同じ作者の作品でも、共通するところもあれば、作品によって描こうとするものも違っていてもおもしろい。そのような思いがきっかけとなり、より深く作品について知りたいという意欲を生徒たちがもってくれるのではないかと思われる。また、読み比べを行い、そこから分かったことを班や全体で話し合うことによって、人物像を客観的にとらえたり、物語世界を俯瞰的にとらえたりすることができるという我々が目指す生徒像に、より近づくことが可能となるのではないかと考えた。学び合いの結果、一人一人の読みがどう変化したかは、初発の感想と単元のまとめとして書く批評文から知ることができた。

#### (4) 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	各作品を読み、内容をとらえる。	1 2	・「ごん狐」を通読し、初発の感想を書く。 ・「牛をつないだ樁の木」「手袋を買いに」を通読し、初発の感想を書く。
2	3つの作品を読み比べながら、作品の魅力について考える。	3 4	・表現や仕掛けに注目しながら内容について読み深める。 ◇各作品が書かれた順番について話し合い、作者の思いについて考える。
3	批評文を書き、読み合う。	5	・批評文を書き、互いに鑑賞し合う。

## (5) 授業の実際

## ① 懐かしい作品との再会

これまで培ってきた読みの力を試すために、一度読んだことのある作品をもう一度読み直してみようということを伝えた後、黒板に「ごん狐」の絵本の表紙を拡大したものを貼った。すると、教室のあちらこちらから歓声が上がった。「これ、読んだことがある人？」と問うと、ほとんどの生徒が手を挙げた。小学校時代に学習したことがかなり印象強く残っているようである。続いて「手袋を買いに」についても表紙を拡大したものを示すと同じような反応が返ってきた。これも懐かしいと感じる作品のようである。この2作品については抵抗なく読み進めることができた。「牛をつないだ樁の木」についてはほとんどの生徒が知らず、読んだことがあると答えた生徒は1名だけであった。

## ② 作品の分析

第2次の学習として、各作品を表現や仕掛けに注目しながら読み深めることを行った。その際、生徒たちには次の二点について指示した。

## ● 行動描写に注目する

作品を読み深めていく上で、今回は作品に描かれている行動描写に着目することを柱として、次のような指示を与えた。

(i) 注目する登場人物を決めなさい。

(ii) その人物の行動が分かる部分に線を引きなさい。

(iii) 線を引いた部分から次のことについて考えて、書けることがあればテキストに書き込みをしなさい。

ア なぜそうしたのか(理由)

イ その時の気持ち

ウ その時の状況

エ そんなことをする人の性格

線を引く場所が定まらず困っている生徒に対しては、分かりやすいところから一緒に見て何方所か線を引く、判断に困るところはそのままにして次へ進むよう指示した。また、書き込みができず困っている生徒に対しては、ア～エの全てに答えるのではなく、どれか書けそうなことについて書けばよいこと、線だけで終わる部分があっても良いことを伝えた。

これは表現されていることが誰の行動であるかはっきりさせるという作業であり、読み取りが苦手な生徒にとっても、比較的取り組みやすい活動である。そして実際に行ってみると、ただ読んでいるだけでは気付かなかったことがいくつかわかってきた。

## ● 「小説の魅力にせまる十個のヒント」を生徒に与える

## 「小説に魅力にせまる十個のヒント」

- |         |       |           |       |        |
|---------|-------|-----------|-------|--------|
| 1, 登場人物 | 2, 設定 | 3, 構成     | 4, 題名 | 5, 視点  |
| 6, 表現技法 | 7, 工夫 | 8, 作者と他作品 | 9, 主題 | 10, 批評 |

これは前年秋に一度使ったものである。これらの項目をもとに、書けるところがあればノートにまとめるよう指示をした。

## ③ 「2番目に書かれたのはどれ？」

この分析ノートをもとに3つの作品が書かれた順番について各自で考えさせ、自分の思う順番とそう考えた理由をワークシートに記入させた。第2次の2時間目には、グループごとに自分の考えを発表し合った。なお、このグループは話し合いがスムーズに行われるよう、生活班で行い、司会係・記録係を事前に決めておいた。各グループでの話し合いの結果には次のようなものがあった。(4班抜粋)

<p>〔1班〕 牛椿→ごん→手袋</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オノマトペが増えている。</li> <li>・牛椿とごんは内容が似ている。</li> <li>・言葉がどんどん現代に近づいている。</li> <li>・手袋の人間描写が一番現代に近い。</li> </ul>	<p>〔2班〕 ごん→手袋→牛椿</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・秋、冬、春という季節順になっている。</li> <li>・心情の変化が広がっている。</li> </ul>
<p>〔5班〕 牛椿→手袋→ごん</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人と動物の関わりの変化。</li> <li>・内容が濃くなってくる。</li> <li>・優しく素直な主人公。</li> </ul>	<p>〔6班〕 ごん→手袋→牛椿 牛椿→手袋→ごん</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・時代順。</li> <li>・終わり方がハッピーエンド。</li> </ul>

この単元のまとめとして書いた批評文には次のようなものが見られた。

- ・……私がこの物語を読んで思ったことは、この物語に出てくる二匹の狐の心情は、南吉そのものではないかということだ。子狐は「人間はいいもの」と言っていることに対して、お母さん狐は「ほんとうに人間はいいものかしら」と言っていることから、南吉は人間を少し疑っているのではないかと思った。私は、南吉は自分が両親からもらうはずだった愛情を、物語という形にして親子の狐に託したのではないかと思った。(生徒D)
- ・……この話には亡くなりそうな老人が出てきます。老人は海蔵さんのおかげで人のことも考える良い人になります。南吉もこの老人と同じです。自分が死ぬ前に、人間を信じられるようになり、人間はいいものだということに気づいたんだと思います。これらのことから、新美南吉の作品は、「人間はいいものか」という疑問から、「人間はいいものだ」という考え方に変化していると思います。(生徒E)

このように作者のその時の心情や、心境の変化についても思いをめぐらせた生徒も少なくなかった。一方、単元の最初の段階ではあまり詳しく感想をまとめることのできなかったが、今回の学習を通して作品の見方に成長の跡が見られるようになった生徒も現れた。

- ・……この作品を読んで、人間が優しくて子狐が間違えて出した手の方でも捕まえたりしなかったのはほっとしました。(生徒F・初発の感想)
- ↓
- ・……一つ目に色彩豊かな表現です。子狐が帽子屋を探している場面では、黒い看板や青い電灯などの表現が出てきて、読者が想像しやすいような工夫がされていると思います。二つ目に対比です。人間をおそろしいものだと考えている親狐と子狐や、赤・黄・青などの町の灯の対比がありました。作者は対比を作ることで親子の中にある考え方の違いやほんとうに人間はおそろしいものなのかという疑問を表現したかったのだと思います。三つ目に比喩表現です。戸をたたく音や……。(生徒F・批評文の一部)

この生徒のように、初発の感想では「懐かしい」「かわいそう」という印象を述べることで終わっていた生徒の内、76%が3つ以上の理由をあげて批評文を書くことができるようになっていた。また、作中の登場人物だけでなく、新美南吉の人柄や生き方についてもふれている生徒が全体の4割近くいた。これは、作品を読むことを通して、その背景にある人物のあり方にも意識を向けるようになったということであり、読みの成長の一つであると言える。

## (6) 成果と課題

成果としては、作品が書かれた順番を理由付けるために、生徒一人一人が作品に向き合い、その構成や表現の工夫などについて深く考えたこと、また、互いの意見を交換し合うことで自分の気付かなかったことを発見したり、見方や考え方を広げることができたことが挙げられる。

これまでの学習で学んだことが実際の作品の中でどう生かされているか考えることができた。また、そういう読み取りができるようになったと一人一人が実感し、自分の成長を感じる良い機会となった。

一方、課題としては話し合いのあり方が挙げられる。今回は柱となる枠組みを特に設けず、各自が発見したことを発表しようというかたちで行ったところ、グループ内での話し合いは盛り上がったものの、その後の全体での発表は単なる報告会になり、それ以上の深まりを生む話し合いとはならなかった。各グループがあげた理由を見ると、作品に描かれた時代設定など、理由としてふさわしくないものもあった。これを自分たちで指摘し合えるようにするには、何について話し合うのか、話し合いの必然性を生む枠組みの設定と、掘り下げの具体的働きかけが重要であると思われる。また、この単元では読むことに力を入れたため、まとめとして行った批評文を書く活動に十分時間をかけることができなかった。授業者はここで生徒にどんな力をつけさせたいのかきちんととらえ、生徒の活動を吟味していく必要があると感じた。

## 2 「書くこと」の実践から (①ウソでもいい日記 ②友達からの評価場面)

### (1) ウソ日記を書こう

文章を書くことに抵抗感をもつ生徒は少なくない。しかし、書くことの高めるためには、何らかの方法でこの抵抗感を減らし、自分の考えや思いを文字にすることを繰り返し行う必要がある。

また、新しい教材文に入る際、新出漢字・新出音訓とともに重要な語句についても辞書などを使って意味調べをすることは多い。しかし、これらの言葉が本当に自分の語彙として定着するためには、それを文章の中で正しく使えるようになることが必要である。

これら二つの課題をクリアするために「ウソ日記」を行った。これは、もともと東京都港区立赤坂中学校の甲斐理恵子先生の実践にヒントを得て始めた活動であるが、匿名性を保証すること、書き終わったあとで互いの作品を読み合うことに工夫を加えている。学習活動の概要は、次の通りである。

①「意」マーク（意味を調べる）のついた語句を中心に辞書を使って意味調べを行い、ノートにまとめる。

（マーク付き以外にも、気になった語句を必ずいくつか加える。）

②「ウソ日記ワークシート」を使って日記を書く。

- ・氏名欄に実名は書かない。（ペンネーム可。無記名でもよい。）
- ・日付は話の内容に合った日付にする。
- ・使用した語句を「使用単語リスト」に、その数を「使用数」欄に記入する。  
（使用する語句の数は自分で決めて良い。）
- ・返却するときのために自分だけが分かる「ID」を必ず記入する。
- ・時間内に書き終わらない場合は、次の時間までに書いておく。

③「ウソ日記」を読み合う。

- ・1分30秒の間に作品を読み、裏面に評価を行う。
- ・評価の方法は、「A・B・C」「星の数」「コメント」等、変化をつける。評価に責任をもつため、評価者名を記入する。



「TTYL」の作品は書き出しに工夫がある。10個の語句を使いながら、独自の世界を作っている。何がどうなったかをあえて分からないように書き、「この先はどうなるのだろうか？」を感じさせるところに読み手への意識が働いていることがわかる。「mc 0 0」の作品は「Donald・マクDonald」や「ビッグ・マック」といった固有名詞を取り入れながら、また、「一個には三十グラムもの脂肪」など、保健体育の学習から得た知識も入れながら作品を作っている。どちらも日記というよりショートショートに近いものになっているが、これらも「読むこと」の学習から得たことを活かしている例であると考えられる。

## (2) 成果と課題

初めは「何を書いたらいいかわからない。」と書くことに戸惑った生徒も、2回目、3回目と回を重ねる内に、友達の作品を読むことで「こんなふうには書けばいいのか。」から「あんなふうには書きたい。」とアイデアが浮かぶようになり、スムーズに作業に取り組めるようになった。「抵抗感を減らす」という当初の目的は達成されたと思われる。また、学習後の感想を読むと、「友達の書いた作品を読むのが楽しかった。」「語句を上手に使ってあって驚いた。」「使っている語句は同じなのに、元の話とは全く違うストーリーに仕上げたてあってすごかった。」などと、この活動を楽しみながら、文章を書くことへの関心の高まりを感じるものが多かった。また、1分30秒と時間を区切って回しながら評価を書くことで、集中して読むことや作品の優れているところを見つけて言葉で表す訓練にもなったと思われる。回数を重ねるごとに作品の質も高まり、「ぜひ、またやりたい。」といった感想も多かったが、この活動を実施するための時間をどう作っていくかも今後の課題である。

## 3 「話すこと・聞くこと」の実践から (①発表順は抽選で ②友達からの評価場面)

### (1) スピーチ会を開く

日常の授業で培った「話すこと・聞くこと」の力を試す場として、学期に1回のスピーチ会を開催している。今年度開催したスピーチ会のテーマと時期、1人あたりの持ち時間は次の通りである。

- ・ 1学期「私の好きなこと」(4月下旬, 1分間)
- ・ 2学期「私の夏休み」(9月上旬, 1分間)
- ・ 3学期「3年間で得たもの」(2月下旬, 1分30秒間)

1学期はクラス替え直後であり、人間関係も安定していない時期である。そのため、互いを理解し合う材料になればよいと思ってこのテーマに設定した。2学期は夏休み中であつた出来事の中から紹介したいエピソードを選ぶことができると考えた。3学期は中学校生活を振り返って何が語れるか、聴いてみたいと思いこのテーマに設定した。

### (2) 材料を集める

スピーチ会の開催を予告した際(開催日の数日前)、右のような簡単なワークシートを配布し、これを使って話す材料を集めたり整理したりさせている。このシートを見ながら話をするか、見ずに話すかは本人が決めることにしている。

スピーチ「私が得たもの」(中学校生活を振り返る)

① 好きなこと

② 私の夏休み

③ 3年間で得たもの

④ 先生の名前

⑤ 学年・クラス

### (3) 順番は「高性能抽選マシン」で

私が開くスピーチ会では発表の順番は「高性能抽選マシン」で決めることにしている。A4サイズの段ボール箱に「高性能抽選マシン」とラベルを貼り、出席番号を書いたカードを入れただけの簡単なものだが、スピーチを終えた人が次の発表者をこれで引き当てるというルールで順番を決める。これにより、いつ自分の出番が来るか分からないという緊張感があるため、必然的にスピーチの内容について事前の準備を細かく行うことができる。トップバッターは誰が務めるのかという問題については、スピーチを終えた人に次を決める権利があるというルールに基づき、私が同じテーマ、同じ時間で最初にスピーチをし、くじを引くことにしている。これにより、適切な声の大きさや速さなどの基準を示すことにもなっている。

### (4) 評価について

スピーチ会は「話すこと・聞くこと」のトレーニングの場であるため、聞く際にも「友達のスピーチを評価する」という課題を与えている。それには次のような評価シートを使っている。

「スピーチ評価表」

No.	氏名	構成	大きさ	速さ	メモ	推薦
1						
2						
3						

実際に配布するものは氏名欄にクラス全員の名前が入ったものである。話の「構成」、声の「大きさ」、話す「速さ」について「A・B・C」や「◎・○・△」などを用いて評価する。「目を見て聞く」「あいずちを打つ」など聞く態度も大切にしてほしいため、メモはどんな話であったか後で思い出すための材料程度に簡単に記せばよいことにしている。全員の発表が終わった後、その日のスピーチで良かったと思われるものを3つ（または5つ）選んで「推薦」欄に印をつけて提出し、みんなの推薦が多かったもの、私が良いと思ったものを、後日発表するようにしている。また、この評価表には合わせて感想も書くようにしている。自分が話したことについて、友達の話聞いたことについて、両面からの気付きや思いを書き留めておき、後日いくつかを紹介するようにしている。

### (5) 成果と課題

1学期は1分間の途中で話が終わってしまい、沈黙に耐えなければならない生徒も多くいた。また、声が小さくて何を話しているのか聞こえてこない生徒も数名いた。しかし、2学期になると1分間が長いとは感じられなくなり、3学期になると聞こえないという生徒はいなくなった。「この人、すごい!」「あの人の話はおもしろい。」そう感じられる友達のスピーチから大事なことを学び取り、自分のスピーチに活かす姿が多く見られるようになってきた。みんなに伝わるための声の大きさ、口の開き方、楽しく聞いてもらうための話の構成など、一人一人が工夫をしてスピーチ会に臨んでいることが感じられる。3学期は持ち時間を1分から1分30秒に長くしたため、1時間の授業で全員がスピーチを終えることはできなくなったが、それでもやはり全員がスピーチをするという機会を設ける意味はあると考えた。

4 「漢字に関する事項」についての実践から (1)クラスごとに異なる出題  
 (2)1枚のシート(4回分)を提出する場面

(1) 月曜日は漢字テストの日

漢字を正確に書く力を高めるために、今年度から本校国語科では週1回、最初の時間に漢字テストを行うことにした。具体的な方法は次の通りである。

- ①範囲は「漢字練習字典」1ページ。第3学年では3級から行った。
- ②各自のノート(ルーズリーフ)1ページを上下に分けて、2回分として使う。
- ③出題は授業者が口頭で行い、答え合わせは隣同士交換して行う。
- ④ノートは4回分終わったところで提出する。



(2) 成果と課題

この一年の間で一番変化が大きかった生徒の記録は次の通りである。

P	81	82	83	84	.....	101	102	103	104
得点	3	2	2	4	.....	8	8	9	10
	平均 2.75					平均 8.75			

この生徒はもともと漢字を覚えることが苦手で、2年生の頃はテストの際にも漢字で点を取ることを完全に諦めていた様子だった。今年度、毎週欠かさず漢字テストを実施したことにより、「漢字を書いて覚える」→「テストを受ける」→「漢字が書ける」→「漢字を書いて覚える」という良いサイクルができたのだと思われる。1学期初めの4週間と3学期終わりの4週間の平均値が6点も違うというこの生徒は極端な例だが、他の生徒の記録を見ても、回数を重ねるごとに正解率が上がった生徒が圧倒的に多かった。マンネリ化せず、モチベーションをどう維持していくかが今後の課題である。

5 おわりに

生徒にとっての「意外性」と「自分の成長」を意識したこの2年間の取組をまとめてみた。授業者としては、生徒は全体的に意欲をもって取り組み、力を伸ばしたという実感を得ている。しかし、それらは感覚的なものが多く、生徒の成長を具体的に実証できるものは少ない。それぞれの項に挙げた課題について今後も工夫を加えながら実践を続けていくとともに、学習前後の生徒の変化が目で見え、成果が具体的に検証できるような方法についても考えていく必要があると考える。

(ながの しんご 国語科 shingo.nagano@edu.shimane-u.ac.jp)